



神戸大学「展望」発刊にあたり 総合雑誌

全学生教職員に呼びかける

現在ほど、新しい文化の創造が要求されている時はない。現在ほど、真理以外の何ものにも左右されない発言が要求されている時はない。

国民の要求を全く無視した政策を次々と強行していく支配者たちは、ある時は教育機関を使い、ある時はマスコミ機関を使い、またある時は警察権力までも駆使して、国民の自由な思考と発言を押し殺そうと懸命になっている。こういう状態の下に行われる様々な研究や主張は、意識的、無意識的にゆがめられている。また、映画、テレビ、ラジオ、レコード、新聞、雑誌、ベストセラーの本などからわれわれの目に耳に入ってくるものは何か。それは、セックスの露出、無意味な衝動の肯定、殺人と撲り合いの場面、センチメンタルな涙、現実とは何の関係もない空想、ニヒリスティックな頹廃趣味等に他ならない。これらの「文化」は、一時的にはその中に浸ることはできても、決してわれわれを真底からゆり動かさずにはいられないような感動を生みはしない。現在の時代の矛盾から生れたこれらの方向性を失ったものにとらわれていても、またそれらを無視していても、われわれは新しいものを創造することはできない。それらの批判の上にこそ、そういうものにゆがめられない新しい文化の創造が可能であるし、その批判と、新たな創造の自由と、そして場所を獲得し擁護していく時に初めて、それは実現するのである。この総合雑誌は、そういった批判と創造の神戸大学における自由な場所となる時に、初めて発行の意味を持つてであろう。

再び言う。われわれは現在激しい論争を必要としている、学問の各分野において、政治問題

について、社会問題について、神戸大学内の問題について、あるいはわれわれの生き方の問題について、等々。そういう論争の中からこそ未来を築く新しい理論が、文化が生まれて来るであろう。この総合雑誌をそういう論争の場に、あるいは神戸大学の総合的な文化運動のもう一つの行事である開学記念祭に含まれ得ない分野での文化の創造の場に、みんなの手で行く必要がある。

神戸大学に総合雑誌を作ろうという声は、かなり以前からあった。昨年度の六月頃の全学自治会の方針の中に、この事は含まれていた。それが具体的なものとなったのは昨年末の学生会理事事会であった。十一月二十四日に開かれたこの会議の席上で、学内の文化活動の一つとして総合雑誌を発行しよう、学生会はそのために、可能な限りの経済力と労力を提供するということが決議された。その結果学生会の提案に学生自治会（全学自治会）、教職員組合、文化総部、消費生活協同組合が賛同し、以上五団体が主催団体となり、各団体の機能をそれぞれ有機的に発揮しつつ総合雑誌を発行して行こうという事になった。学生会の提案以後、わずか二カ月余りで創刊号が発行できた事は、この雑誌の要求が例え具体的な形をとっていないかたにしろ、神戸大学の中に潜在していた事を意味し、同時にそれはこのような大きな計画を直ちに可能にするだけの組織力が、神戸大学内にすでに存在している事を証明している。

神戸大学の全学生並びに全教職員諸君、学内の総合雑誌の創刊号はここに実現した。これを作り上げる力をわれわれは持っていた。神戸大学の学生、教職員は誰でもこの雑誌に投稿できるし、誰でもこの内容を批判できる。投稿し、批判し、みんなですべてこれを通して神戸大学に新しい文化を育てよう。

学内に激しい論争を巻き起そう。
未来の文化はわれわれの手で築き上げよう。

一九六〇年二月

神戸大学総合雑誌発行委員会

学生の作った授業

マル経自主講座の投石



講義をしてもらった伊賀隆一先生(神戸商大助教授)

学校にいくら要求しても作ってくれない授業があった。学生たちは自ら費用を負担して外から講師を呼び、自分で授業を始めた。「マル経自主講座」がそれである。しかし受講者は少なく、主催した自治会役員は落胆した。だが——単位にな

らない、受講料のいるこの授業を最後まで受け通した学生は数人いた。成功ではなかったとしてもこの体験は、学生による授業改善の問題に重要な経験と教訓を残した。

学問の自由の拡大として

マル経を学べぬ経済学部

旧商大時代からの伝統を誇る神戸大学の経済学部には、マルクス経済学の講座が正規のものとしては全然ない。この事はどう考えて

も変則的な事である。この事は、マルクス経済学の正否とは無関係に提起されるべき問題である。どちらの立場に立つにしても、現在、近代経済学とマルクス経済学という二つの全く相入れない経済学が存在している中

で、片方だけが取り上げないという事は、真の学問に対する態度を歪める以外のどんな役割も果さないであろう。昨年度の経済学部の学生大会でも、マルクス経済学の開講要求決議がなされ、学校側と幾度かの交渉が持たれた。しかし、「担当教授の問題や予算等の理由」で、この要求は実

現されなかった。

しかし、マルクス経済学の講座が開講されない理由の中には、「マルクス」というものを嫌う思想的偏見や大学を学問の場よりも、会社員の場として重視する傾向がありはしないだろうか。もしそういうものがあるとしたら、それらのものは、大学の目的に全く反するものであり、大学にぬられた泥に他ならぬであろう。

だが、学校に要求を受け入れられなかった学生自治会は、そのままでは済まされなかった。「それではわれわれの力で講師を呼んで開講しよう。」という事になった。こうして自主講座が実現したのである。

自主講座の実現

……経済学部自治会の手で去る十月二十日からマルクス経済学の講座が始まった。講師は神戸商大の伊賀隆一助教授で教科書は宮川実著「経済学入門」(青木全書)を使い、また参考書は「経済学教科書」(合同新書)その他を使用する。毎月曜日の四時限目に約十回にわたり続ける予定。「神戸大新聞」四九五号記事より)

新しい講義方法で

最高二十数名受講

当初自治会執行委員の意気込みは大きかった。「われわれは、黒岩助教授退官要求斗争の中で、色々な経験や論争をして、学園の自治とか学問の自由とかいうものが実際にどういうものであるかを、はっきりとつかむことができた。今後は、学園の自治や学問の自由を擁護するだけではなく、それらを拡大してい

く方向での新しい学園づくりの活動をしていかなければならないと思う。マル経自主講座の開講は、授業内容の改善要求と共に、学問の自由を拡大していく活動の一つである。将来はこの講座が正規の授業に組み入れられる事を、われわれは強く要求している。」

開始された講義内容は充実したものであった。「ある程度の問題意識を持っていたためかも知れないけれど、話の要点が明確に理解出来た。」と、一受講者は語っていた。また、「質問や討論なども許されていたのでよく理解できた。」という感想もある。この点に関しては、特に伊賀先生が留意した事であった。伊賀先生は次のように語っている。

「……従来の講義では一方的なコミュニケーションでしかなかった。これのみでは学生の理解の程度や問題意識なども深まらないから、講義時間の半分は学生からの質問やディ

スカッションにすべきですね。」

この自主講座は、単に経済学部だけではなく、学部の学生も受講できるようにになっていた。受講料は二百円であった。しかし、受講者数は最高時で二十数名、少ない時には僅か五、六名——平均受講者十名前後という状態であった。「講師に気の毒なくらいだ。」とは、ある受講者の言葉。マル経講座はやはり必要ではなかったのだろうか。それとも受講者の少ないのには他の理由があったのだろうか。その前にまず、この事実がもたらした各方面への反響を見てみよう。